

玉で結ぶ日本列島と長江下流域

李 国 棟

【キーワード】 玉、たま、に、ぬ、[ŋjoh]

1. 『山海経』と玉

二千数百年前の戦国時代に、『山海経』という神秘的な地理案内書が作り上げられた。中国大陸の東西南北および中央の山々の物産を記述するのがその主な内容であるが、まずその記述の仕方を見てみよう。

西次二経の首を、鈴山と曰ふ〔音は髡鉗の鉗。或いは冷に作り、又塗に作る〕。其の上に銅多く、其の下に玉多し。其の木には柎樞多し。

西二百里を、泰〔或いは秦に作る〕冒の山と曰ふ。其の陽に金多く、其の陰に鐵多し。浴水焉より出で、東流して河に注ぐ。其の中に藻玉多く〔藻玉は玉の符彩有る者。或いは東に作る。音は練〕、白蛇多し。

又西一百七十里を、数歴の山と曰ふ。其の上に黄金多く、其の下に銀多し。其の木には柎樞多く、其の鳥には鸚鵡多し。楚水焉より出でて、南流して涓に注ぐ。其の中に白珠多し〔今、蜀郡の平澤より青珠を出す。『尸子』に曰く、水員折する者には珠有り〕。

又西五十里を、高山と曰ふ。其の上に銀多く、其の下に青碧〔碧も亦玉の類なり。今、越嶲會稽縣の東山より碧を出す〕雄黄多し〔晉の太興三年、高平郡界に山崩有り、其中より數千斤の雄黄を出せり〕。其の木には椶多く、其の草には竹多し。涇水焉より出でて〔音は經〕、東流して涓に注ぐ〔今、涇水は安定朝那縣の西の杆頭山より出でて、京兆高陵縣に至りて涓に入るなり〕。其の中に磬石〔『書』に曰く、泗濱の浮磬と。是なり〕青碧多し¹⁾。

以上は『山海経・西次二経』冒頭の四山に関する記述であり、『山海経』における標準的な記述タイプでもある。これによって、『山海経』に①鉱物、②玉石、③植物、④河川、⑤動物という五つの記述ポイントがあることが明らかになり、金鉄などの鉱物と色々な玉は、当時の中国人にとって最も価値の高いものであったということも見て取れるのである。

戦国時代だから、金鉄などの需要が大きく、その価値が非常に高かったことはよく理解できる。しかし、非実用的な玉が金鉄と同レベルに重要視されていたのはなぜであろうか？

凡そ西経の首、錢来の山自り驍山に至るまで、凡て十九山、二千九百五十七里。華山の冢なり〔冢は神鬼の舎る所なり〕。其の之を祠るには太牢を禮す〔牛・羊・豕を太牢と為す〕。踰山の神や、之を祠るには燭を用ひ〔或いは場に作る〕、齋すること百日、百犧を以てし〔牲の純色なる者を犧と為す〕、瘞むるに百瑜を以てす〔瑜も亦美玉の名。音は臬〕。其の酒を湯〔或いは温に作る〕むること百樽〔酒を温めて熱せしむ〕、嬰ぬるに百珪・百璧を以てす〔嬰は之を陳ねて以て環祭するを謂ふなり。或いは曰く、嬰は即ち古の罍の字、盃を謂ふなり。徐州にて云ふと。『穆天子伝』に黄金の嬰と曰ふの属なり〕。(同前)

これは『山海経・西山経』の冒頭であり、踰山の神を祭るときに用いられたのは「百瑜」と「百珪・百璧」であり、祭祀のときに玉が用いられたことと、用いられる玉が大量であったことがとくに注意すべきである。また、『山海経・北次三経』の山の神の祭祀を描写する段落には、「其の十四神の状は皆彘身にして玉を載く。其の之を祠るには皆玉もて瘞めず〔用ふる所の玉を藎めざるなり〕。其の十神の状は皆彘身にして八足、蛇尾あり。其の之を祠るには皆一璧を用ひて之を瘞む」という記述も見られる。こうしてみると、玉が山の神の祭祀に絶対不可欠の物であり、それと金鉄が同レベルに重要視されていたのは、古代中国人の山岳崇拜に起因しているということがついに浮き彫りになった。

2. 漢字「玉」の原義

後漢の許慎は『説文解字』²⁾で「玉」という字を「三つの玉を縦方向で貫き通した形にかたどる」と解釈し、それ以来、この「三玉縦貫説」が定説となり、中国と日本の権威ある漢語・漢和辞典はすべてこの説を取っている。しかし『説文解字』のこの説では、決して山の神と玉の関係、とりわけ山の神を祭るときに玉を埋めたり、首輪のようにつないだりするという最も原始的かつ本質的な行動を説明することができない。玉に対する古代中国人の認識を明らかにするには、「玉」の原義をもう一度追究する必要があると筆者は考えているのである。

楷書では、「玉」と「王」は非常に似ている。もし「三玉縦貫説」が正しいのであれば、この「王」も玉と通じているはずである。しかし、「王」は「玉」の意味をまったく持っておらず、その原形——甲骨文字と金文——が権力を象徴する大きなマサカリであった。一方、「玉」の甲骨文字は「半」と書かれ、その金文は逆に「王」と書かれている。「半」の最上部に植物の苗を意味する「三つ葉」があり、その下の一本の縦線はその植物の根だと考えられる。このイメージと結びつけて金文の「王」を分析してみると、最上部のその横線が地面を意味していることが明らかになる。この最上部の横線を除くと、残っている部分が「土」となり、玉が地下の土中にあるという玉の所在に関する古代中国人の認識が自然に読みとれるのである。

「玉」の楷書では、「土」の二本の横線の間の右側に「点」を入れているが、この「点」につい

て、小川環樹・西田太一郎・赤塚忠の三氏が編纂した『新字源』³⁾は「楷書では、王とのまぎらわしさを避けるため、点を加えて玉と書く」と解釈している。しかし、この「点」はそんなに軽い意味で付け加えられたとは思えない。実際「王」のように、点が「王」の一本目と二本目の横線の右側に付け加えられている字もある。この点については、玉の表面に現れた疵、あるいは玉を磨く人の意だと解釈する人がいるが、筆者の考えでは、「王」が「玉」から派生した変形字にすぎず、本質的には「玉」を意味している。もちろん、「王」の「点」が位置的に表面へと浮上しているから、土中の比較的浅い処の玉と理解してもよいのである。

第1節で述べたが、玉の記述はいつも金属の記述とセットになっている。「玉」と「金」の二字を見ても、確かに下の二本の横線の間にも「点」が入れているという共通点が認められ、玉と金属について古代の中国人が共通の認識を持っていたのではないかと考えられる。『説文解字』をはじめ、多くの辞書は「金」の下方の「二点」を「金属が土中にある形にかたどる」と解釈しているが、この解釈と結びつけて「玉」の「点」を考えると、それも当然のことながら「玉が土中にある形にかたどる」と解釈することができる。もちろん、「金属」の「点」が二つあるのに対して、「玉」の「点」が一つしかないという違いはある。ただこれは金属と玉の埋蔵量の多さによる区別にすぎず、本質的には、二つの「点」も一つの「点」も指示物の所在を示す役割を果たしている、と筆者は考える。

「金」の最上部は「人」である。これは甲骨文や金文における「今」の原字であり、「含む」を意味する。物をすっぽり覆い包む「人」が何を指しているかについては、どの辞書も解釈していないが、筆者の考えでは、これは「山」の金文——「𠄎」に通じる三角形なので、もともと山を指しているはずである。すなわち、「金」はそもそも山の土中に埋まっていると表象されているのである。

「金」はまた「全」と形が似ている。しかし、篆文で「全」はもともと「全」と書かれており、直接的には「金」と関係がないと思われる。直接的な関係があるのはやはり「金」と「玉」の方である。『山海経』を読むと、金属と玉はいずれも山特有の宝物であり、とりわけ「金」の「人」は山そのものをイメージしているので、古代の中国では、金属や玉への崇拜はそのまま山岳信仰とつながっていたと断定できよう。

3. 和語「たま」の原義

和語では、玉のことを「たま」という。「たま」の語源について、これまで「たへまる」や「てるまる」や「たたきまる」などすでに十一説が出されているが、筆者には、これらの説はいずれもわざわざ回り道をしているように思われる。語構成から分析すると、「たま」は「あま」や「はま」と同じく「た+ま」の構成である。「た」は「手」の意、「ま」は「空間」の意。したがって、「たま」は本来「手の空間」を意味するのである。

普通、手の平を延ばすと、平面になるだけで立体的な空間が現れない。しかし、小さな石ころ、あるいは勾玉や真珠を手の平に載せて見るとき、われわれは自然に手の平を丸めて凹みを作る。筆者の考えでは、手の平のこの凹みが「手の空間」であり、「たま」はもともとこの手の平の凹みを指しているのである。

「たまる」という動詞がある。「水がたまる」や「お金がたまる」などがその用例であるが、実は、この「たまる」は前述した「たま」の動詞化にすぎず、石ころや勾玉を持つ時のその手の平の凹みから「物が一カ所に集まり止まって漏れない」というような意味が派生したのであろう。

要するに、「たま」は文字通りに解釈すれば「手の空間」であり、もともと古代人が大切に勾玉や真珠を持つときに作った手の平の凹みを指していたが、のちにこの手の平の凹みが逆に勾玉や真珠ないしすべての小さくて丸みのある物の汎称に変わった。そして汎称という点から判断すれば、玉を指す語として「たま」は決して一番古いのではなく、それ以前に専ら玉を指す語が存在していたにちがいない。次節では、「たま」以前の玉を指す語について引き続き考察してみよう。

4. 和語の「ニ」と長江下流域の「鶏血石」

『古事記』と『日本書紀』を読んでもみると、玉を指す和語が「たま」のほかに、また二つあった。一つは「ニ」、もう一つは「ヌ」。この「ニ」と「ヌ」は玉を指す語として「たま」よりずっと古いと筆者は考えている。

天照大神の孫で、南九州の「高千穂の霊じふる峰」に降臨したニニギノミコトは『古事記』では「邇邇芸命」と当て字されているが、当て字の意味を考慮する『日本書紀』では、「邇邇芸命」が「瓊瓊杵尊」と改められている。すなわち、ニニギノミコトは玉と関わる人物だと強調され、ニニギノミコトの「ニ」が玉を意味していることが明らかになる。

『説文解字』をはじめ、多くの辞書では、「瓊」は赤玉だと解釈されている。「杵」は白突き棒のことで、ニニギノミコトが降臨した「高千穂」の「千穂」は神秘的な稲穂を意味する。以上の三条件をふまえてみると、ニニギノミコトは赤玉製の白突き棒を手に「ニギ」っている姿をしているということが分かる。言語学的には、「ニニギ」を「ニ」と「ニギ」に分解することができる。「ニ」は玉を意味し、「ニギ」は豊饒を意味する。したがってトータルで判断すると、ニニギノミコトは赤玉製の白突き棒を手に「ニギ」っている稲作の豊饒神であるにちがいない。

筆者は拙著『「邪馬臺」は「やまたい」と読まず⁴⁾で、「天孫降臨」という神話は、ニニギノミコトが海外からやってきたことを意味していると指摘した。和語では、「天」は「あま」というが、「海」も「あま」という。すなわち、上古時代の日本人は海と天を同一視していたわけだが、その理由を考えると、意外に簡単である。日本列島のどこかに立って海の彼方をじっと眺めると、海天一色の世界が見える。そして、この海天一色の彼方から人がやってきた情景を日本列島側から見ると、まるで「天」から人が「降臨」したかのように見える。ニニギノミコトたちはすなわ

ちこのように海天一色の彼方から日本列島に移住してきた移民集団であったのだ。

それでは、ニニギノミコトたちはいったいどこからやってきたのだろうか？一部の学者は彼が高千穂の「霊じふる峰」に降臨した時の言葉「此地は韓國に向ひ笠紗の御前にま來通りて」をふまえて、彼らが朝鮮半島南部からやってきたのだと主張しているが、筆者の考えでは、ここの「韓國」は海外または外国一般を指す言葉であり、「韓國」という名称だけでは、ニニギノミコトたちの故郷が朝鮮半島だと断定することができない。彼らの故郷を特定するには、やはり彼ら自身が持つ文化的特徴から判断しなければならない。

ニニギノミコトは稲作の豊饒神である。しかし、稲作の豊饒神はまず稲作に適している平野ではなく、正反対の山に降臨している。これは彼らが稲作の民であると同時に山岳信仰をも持っていたことの現れであり、この点では、明らかに長江下流域に通じていた。長江下流域の五〇〇〇年前の良渚遺跡は越族の稲作の遺跡であり、玉文化も非常に発達していた。そこから玉琮や佩飾など多くの玉製品が出土し、しかもそれらに共通のモチーフがあったことを確認することができる。玉琮は長短様々であるが、基本的には人間の脊椎の形を呈し、山の神髓と見立てられていたのではないかと考えられる。多くの玉琮には虎頭文様（末頁の写真1を参照）が陰刻あるいは陽刻されているが、この文様は漢字「山」の形をした玉器（末頁の写真2を参照）や柱状（末頁の写真3を参照）の玉器にも見られるので、現地の越族にとって虎が山の神であることと、それらの玉器が山の神を祭り上げるときの祭具であったことがよく分かる。そして『左伝』によると、長江中下流域ではかつて虎のことを「夔」と呼ばれていたもので、上述の玉器に彫られたその虎は「夔」であったにちがいない。「夔」の発音は「と」、『倭名類聚抄』の見解では、この「と」は和語「とら」の語源であるという。「とら」の「と」にも、日本列島と長江下流域の関連が認められるが、ただ本論のテーマが虎ではないので、虎のことを深く追究することをやめておく。

また玉の話にもどるが、赤玉といえ、日本の多くの人は自然にメノウを連想する。確かに昔の日本では、メノウが赤玉と称され、出雲大社が大和朝廷に献上するために作った三色の玉製の首輪には、メノウが確かに赤玉として用いられていた。しかし本来は、メノウはただ真の赤玉がない場合の代替品にすぎず、真の赤玉は決してメノウではない。長江下流域（現在の浙江省昌化県）では、「鶏血石」（末頁の写真4と5を参照）をずっと産出してきた。「鶏血石」は鮮やかな鶏の血の色を呈し、まさに「赤玉」と称すべき玉石である。筆者の考えでは、ニニギノミコトはすなわち「鶏血石」で造った儀式用の臼突き棒を「ニギ」って長江下流域から南九州の高千穂地方にやってきたのである。

日本列島も朝鮮半島も「鶏血石」を産出していない。この点から見ても、ニニギノミコトが日本列島内の人でもなければ、朝鮮半島南部からやってきた人でもない。彼の故郷はやはり長江下流域と断定した方が妥当であり、「ニ」という赤玉によって、長江下流域と南九州の高千穂地方が結ばれていたのであった。

2003年9月、宮崎考古学会の会長日高正晴氏は『西都原古代文化を探る—東アジアの観点から』⁵⁾を出版し、南九州と長江下流域の関係について考察した。日高氏の紹介によると、1818年2月、日向国那珂郡今町（現宮崎県串間市）の農民佐吉が王之山で石棺を掘り出し、その中から中国製の神獸穀粒紋玉璧を一枚発見したという。この玉璧は中国の周代に作られ、王侯が所有した物だと推定され、現在、旧藩主前田家に所蔵されているが、おもしろいことに、日高氏は1991年中国広東省広州市の南越王墓博物館を見学した時に、展示した副葬品のなかで串間市出土の玉璧と「ほとんど同一形態で、同一文様の副葬品を奇しくも目撃し」た。

この南越は、紀元前四世紀に楚国に滅ぼされた越国の一部の者が南下して、福建、広東両省一帯につくった国です。この南越王の所有物であった穀璧なども、あるいは越の時代に浙江省一帯の江南地方で入手したものかもしれませんが、一方、越が亡んだ紀元前四世紀から三世紀にかけてのころ、越人が海岸に逃れ、黒潮本流に乗って日向の南海岸に漂着したと推論してみることもできるかもしれません。この時期は、弥生時代前期ごろに相当しますが、あるいは漂着の時期は下るかもしれません。（第2部第一章第五節）

日高氏の南越王墓博物館での発見は、越と宮崎との関係を検証する上で実に重要な物証を提供しており、その意義は非常に大きい。南越国と長江下流域の越国はもともと同じなので、王様が所持した玉璧も同じのはずである。南越国の越王は祖国から逃亡した王であるので、異国では自分の身分を証明できる宝物を持つ必要があった。実際、稲作と太陽神崇拜のモチーフを持つその玉璧はすなわち異国で王様の身分を証明できる格好な宝物であり、この意味では、日向国那珂郡今町（現宮崎県串間市）の王之山で埋葬されたその人も越族の王であった可能性が極めて高い。「王之山」という地名も事実この埋葬者が「王」であり、その山自体が王の陵墓であることを明確に示しているのである。

もちろん、越人の日向への渡来の時期について、日高氏は「紀元前四世紀から三世紀にかけてのころ」か、あるいはさらに「下るかもしれません」と述べたにとどまったが、当時の状況、とりわけ秦の始皇帝が越国を滅ぼした前後の政治状況から判断すると、この越王の渡来は秦の始皇帝が中国を統一した紀元前221年ごろであったのではないかと考えられる。

5. 北越の「ヌ」と越語の「ŋioh」

一方、玉はまた「ヌ」と呼ばれ、北越地方ではこの「ヌ」で命名された「ヌナカワ」政権も実在していた。

北越地方は翡翠の産地として知られている。しかし、翡翠は北越地方の至所にあるというわけではなく、「ヌナカワ」（漢字では、「沼名河」または「沼河」と書く）流域、すなわち現在の

新潟県糸魚川市の姫川流域(末頁の写真6を参照)と青海川流域に限られていた。これまでに、「ヌナカワ」の「ヌナ」を一語と見なし、その意味を玉と解釈した学者がいるが、筆者の考えでは、「ヌ」の後の「ナ」が「ノ」の交替形にすぎず、この川は実際「ヌ」の川、すなわち「翡翠」の川と理解すべきである。

清水秀晃氏は『日本語源辞典』⁶⁾で、「ヌ」についてこう述べている。

玉の類。瓊の交替形ともいわれているが、色彩的に玉の様子をとらえたものがニ=丹であった、ヌはヌナトモモユラにと使用されているごとく、視覚的にそのゆるやかに揺れ動くさまをとらえたものではないかと思う。

「ニ」が色彩から玉を捉えた語であるのに対して、「ヌ」は揺れ動く様から玉を捉えた語であると解釈されているが、説得力が弱い。しかし、「ヌナト」が「玉の音」の意なので、「ヌ」も玉を意味していることは確かである。「たま」という玉を間接的に指す語が生まれる以前の上古時代では、玉は「ニ」とも「ヌ」とも呼ばれていた。音韻的には「ニ」と「ヌ」が通じると見て、「ヌ」は「ニ」の交替形だと考える人がいるが、しかし、「ニ」がもともと長江下流域の「鶏血石」を指すということからも分かるように、「ニ」と「ヌ」はもともと和語ではなく、ともに長江下流域の越語である可能性が非常に高い。

越語では、玉のことを「ŋioh」といい、和語に直せば、「ニ」と「ヌ」の中間音に相当する。和語として非常に発音しにくいので、結局和語として定着するとき、最初の子音を取る「ニ」とその全体を約音する「ヌ」に分かれてしまったのではないかと思われる。要するに、発音上、玉を意味する越語の「ŋioh」が和語「ニ」と「ヌ」の語源であると見なしでも全然おかしくないのである。

前掲の拙著『「邪馬臺」は「やまたい」と読まず』の第八章で指摘したが、ニニギノミコとその三人の子供は火のことを「ほ」と発音し、彼らの名前「天津彦彦火瓊瓊杵尊」(あまつひこひこほのににぎのみこと)と「火照命」(ほでりのみこと)、「火須勢理命」(ほすせりのみこと)、「火遠理命」(ほをりのみこと)がその証拠である。『広辞苑』によると、「ほ」は「ひ」の古形だというのが、筆者の考えでは、「ほ」はそもそも和語ではない。李珍華・周長楫編撰『漢字古今音表(修訂本)』⁷⁾によると、越語音で「火」という漢字を発音すると、「həu」となり、この「həu」を和語音に直すと、「ほ」になる。もし越語音ではなく、上古時代の漢語音で発音すると、「火」は「huəi」となる。ニニギノミコが自分の名前と自分の子供の名前に故意に「火」の越語音「ほ」を入れていることから判断すると、彼は長江下流域から移住してきた越族の人にちがいない。ニニギノミコと結婚した木花佐久夜毘売は「桜ちゃん」の意味で、現地の可愛い女の子であった。越族のニニギノミコは彼女との結婚を通して南九州に定住することができたわけだが、火のこ

とを越語音「ほ」で発音している所から見ても、玉を意味する「ニ」はやはり越語音だと判断した方が妥当であろう。

一方、北越地方は縄文時代からずっと長江下流域と密接にかかわっていた。日本の学者藤田富士夫氏も奈良文化財研究所編集『日本の考古学』⁸⁾ 上巻第三章「縄文時代」で指摘しているが、現在の富山県朝日町の境 A 遺跡から出土した縄文時代の翡翠大珠の未製品に長江下流域の良渚文化の管錐技法が用いられ、両地域の玉文化がつながっていたことが実証された。1993年、福井県金津町桑野遺跡に対する考古学的調査によって、縄文早期末に比定される二七基の土壙から玉製の珉状耳飾（末頁の写真7を参照）が八〇点以上発見された。珉はもともと中国特有の玉製装身具であり、現段階で確認された最も古い玉珉は中国北方の紅山文化の査海遺跡から出土した七六〇〇年ほど前の玉珉である。その次は長江下流域の稲作遺跡である河姆渡遺跡から出土した七〇〇〇年前の玉珉であるが、藤田富士夫氏は前掲書で玉珉の形状からすべての玉珉を A、B、C、D の四類に分類し、さらに一類を三タイプに細分した上で、桑野遺跡から出土した玉珉は D 類に属し、長江下流域の玉珉と通じていると指摘している。

このようなことから、日本列島には最初に東日本域へ中国東北部に起源をもつ B3類が伝わり、次いで南九州地域へ江南に祖形をもつ D 類の珉文化が伝播したと考えられる。

江南に祖形をもつ D 類は南九州へ伝播し、まもなく縄文早期末葉から前期初頭に列島全域に及ぶタイプとして広がった。縄文装身具を加工製作している富山県上市町の極楽寺遺跡では、様々なタイプに混じって D 類が多く製作されている。その後の前期前葉から中葉にかけては B3類が衰退し、かわって D 類が主流となる。その代表的な加工遺跡には長野県の阿久遺跡がある。

これは藤田富士夫氏が前掲書で出した結論である。北越の玉珉は本当に南九州から伝わってきたか、それとも長江下流域から直接伝わってきたかについてまだ検討する余地があると思うが、南九州と北越地方の二カ所と長江下流域の関連がとくに緊密であったのは事実である。本論で検討してきた「ニ」と「ヌ」が越語の「ŋioh」に由来していることは、まさに言語面の化石的な証拠だと言えよう。

要するに、日本の北越地方の玉文化は長江下流域の玉文化の影響を濃厚に受けており、これは何よりも六〇〇〇年前から存在した北越地方と長江下流域の越族との玉による交流を有力に物語っているのである。

モスクワ大学の考古文化学者セルゲイ・ラブチェフ（Sergey LAPTEFF）氏は2006年4月、「Relationships Between Jomon Culture and the Cultures of the Yangtze, South China, and Continental Southeast Asian Areas」⁹⁾と題する論文のなかで、稲作という共通の文化的背景を

指摘した上で石器、骨器、陶器、玉器を比較・研究し、縄文文化と長江以南の文化との関連性についてこう論証している。

The same types of stone and bone tools are preserved in Tanshishan culture (around 3000-2000 B.C.E.). Though polished tools already prevail over unpolished, chipped axes are frequent(Fig.41). Stone arrows and shell hoes and knives increased. Adornments are very simple, usually stone and jade round bracelets with openings as Keqiotou (Fig.42). The same type of adornments are characteristic for Jomon (Fig.21), and though in general the territory of spread of these bracelets is rather wide(the coastal region of East Asia), so that we cannot connect their origin solely with the Fujian region. Fujian is one of the most probable ways of their spread to Japan. Tanshishan culture is the most probable way of the transmission of Yangtze and continental South Chinese, Southeast Asian cultural influences to the Japanese archipelago. All types of stone tools found in Minjiang river basin are also typical for Early and Middle Jomon (4500-2000 B.C.E.), especially for the Kansai region (中略). In this case, it is possible to see close relationships between the two cultures, most probably indicating that there were direct cross-cultural contacts or migrations.

セルゲイ・ラプチェフ氏は以上の引用の中で福建省の遺跡の出土品と日本の縄文遺跡の出土品の共通性を指摘し、とりわけ写真付きで穀丘頭（Keqiotou）遺跡から出土した玉珓と縄文中期の玉珓との共通性を指摘している。セルゲイ・ラプチェフ氏は長江下流域よりも、さらにその南に位置する福建省を重視し、「Fujian was probably one of the main bridges connecting Japan with Asian continent for migrations of human groups and possibly for trade」と福建省のアジア大陸と日本列島をつなぐ架け橋としての意義を強調している。もちろん、筆者はセルゲイ・ラプチェフ氏の意見に賛成である。ただし、筆者は福建省も越族の居住地域であり、長江下流域から福建省にかけての中国大陸の東南沿海地域ではかつて「百越」が暮らしていたという事実を補足したい。すなわち、福建省遺跡の出土品が持つ文化的特徴はそのまま長江下流域遺跡の出土品とつながっており、同じ長江文明の特徴だと考えてもよいので、セルゲイ・ラプチェフ氏の上述の考察によって、長江下流域およびその以南の越族文化と日本の縄文文化との共通性、または両地域の人的交流と物的交流の実態がいっそう明らかになったと筆者は考えている。

6. ammonia 海進と「内越」「外越」の出現

縄文時代や弥生時代の日本列島と長江下流域との交流について考察する場合、越族のことは確かに最も重要な事項として考慮すべきである。そもそも日本列島と大陸が陸続きであり、東シナ

海の底となっている大陸棚がほとんど露出していた二万三〇〇〇年前、越族は後に東シナ海の底となったその大陸棚に生活していた。当時、中国大陸は高い台地であり、日本列島は高い山脈であった。しかし、一万五〇〇〇年前に ammonia 海進が発生し、海面が次第に上昇した。中国の著名な歴史地理学者陳橋馭氏がすでに「越族の発展と流散」¹⁰⁾で指摘しているが、二万三〇〇〇年前の東シナ海は、海面が今より一三六メートルほど低かったが、一万二〇〇〇年前の海面は今よりマイナス一〇メートルに上昇し、一万一〇〇〇年前の海面は今よりマイナス六〇メートルにまで到達した。その結果、東シナ海が現れ、日本列島が形成された。そしてその時、越族も移転を余儀なくされてしまった。その後、海面がさらに上昇し、八〇〇〇年ほど前には今よりマイナス五メートルに、六〇〇〇年ほど前には今よりプラス二メートルにまで上昇してしまった。七〇〇〇年前の水稻が大量に出土した長江下流域の河姆渡遺跡は、まさに六〇〇〇年前の今より一二メートル高い海面の上昇によって滅ぼされたのであろう。

一万一〇〇〇年前、海面が今よりマイナス六〇メートルに達した時に、今は東シナ海の底となっている大陸棚で暮らしていた越族は移転を始めたが、彼らの移転コースは主に二本あったと推察される。一本は平地となった中国大陸への後退であり、もう一つは日本列島など島となった島々への上陸であったが、のちに、中国大陸に移転してきた人々は「内越」、すなわち内陸部の越族と呼ばれ、日本列島など東シナ海の中の島々に上陸した人々は「外越」、すなわち海外の越族と呼ばれるようになった。そして、日本列島に上陸した「外越」の人々は次第に北越地方に集まってきたので、北越地方は「こし」と呼ばれ、「越」という字に当てられるようになったのであろう。

和語の「こし」は「こ」と「し」に分解することができる。「こ」は「凝る・凝縮する・密集する」の意であり、その後の「し」は状態接尾辞である。すなわち、「こし」という地名自体は、「外越」の人々が北越地方に集中して住んでいることを意味しているわけだが、それはなぜかといえば、最初はやはり玉のためであっただろう。「ヌナカワ」という玉の川を支配し、それを基盤とした「ヌナカワ」政権はすなわち玉を求めてきた「外越」の政権であったと考えられる。現在、新潟市に「沼垂」（ぬたり）という非常に古い地名が残っている。大昔、「沼垂」は「沼足」と書かれていた。ここの「ぬ」が玉の意なので、「沼足」は玉がいっぱいある所という意味になる。この地名には、「ぬ」を求めて北越地方にやってきた「外越」の人々のエネルギーとそこでたくさん玉を発見した時の喜びが凝縮されているのである。

実は、新潟県の佐渡島は赤玉（末頁の写真8を参照）をも産出していた。長江下流域の「鶏血石」と比べて、佐渡の赤玉はそれほど鮮やかでなく、朱に近い色合いを呈している。とはいえ、歴とした赤玉であるので、当時、「外越」の人々がそれらを発見したとき、やはり大変喜んでいただろう。

「さど」という地名を「さ」と「ど」に分解してみると、「さ」は「真」の意、「ど」は「と」の音便で、「処」がその原義であろう。すなわち「さど」はもともと「真の処」を意味している

わけだが、なぜこの島が「真の処」と呼ばれているかという、やはり赤玉とかかわっているのである。漢語語彙には「真珠」「真金」「真人」「真理」「真跡」「真相」のような一連の熟語があり、「真玉」もその中の一語である。そして、「真+〇」という語構成の中の「真」はいずれも最も優れているという意味に用いられているので、「真玉」は当然最も優れている玉の別称だと理解できる。しかし、材質や色彩や文様によって分けられる種々様々な玉の中で「真玉」と呼ばれた玉はいったいどんな玉かという、意外に定説が見つからない。普通の葉蠟石や滑石ではなく、硬度が高く、色彩も鮮やかな透角閃石を指すと考える人がいるが、筆者の考えでは、「真玉」は決して一般的な透角閃石を指すのではなく、さらにその品種を限定する必要がある。「さど」という地名の語義と赤玉を産することを結びつけてみると、「さど」はもともと「真玉の産地」を意味し、「真玉」はもともと赤玉を指していた可能性が充分考えられるのである。

日本列島の北越地方には翡翠もあるし、赤玉もある。そして、この二つはいずれも越族の最も珍重する神宝であった。こういうわけで、「外越」の人々は次第に北越地方に集中し、そしてそれらを採掘して、長江下流域の「内越」に売りさばっていたのではないかと推測される。「ヌナカワ」政権の背後には、このような「内越」との玉石交易があったにちがいない。

紀元前221年、秦の始皇帝はついに「内越」の国——越国を滅ぼして、中国全土を統一した。しかしその後も、「内越」の人々は依然として「外越」と連絡を取って越国の復興を目論んでいるのではないかと秦の始皇帝はずっと心配していた。したがって十三年後越国を視察した時に、彼はまた強制的な移民政策を実施したのであった。

政は号を更めて秦の始皇帝と為し、其の三十七年を以て東のかた会稽に遊す。（中略）正月甲戌を以て大越（現在の紹興——筆者注）に到り、都亭に留舎す。（中略）是の時、大越の民を徙して余杭、伊攻、□故鄣に置く。因りて天下の罪適ある吏民を徙して、海南の故大越の処に置き、以て東海の外越に備う。乃ち大越を更名して山陰と曰う。

これは越族の歴史を記録する『越絶書』¹¹⁾ 卷八に記録された史実であり、この中の「以て東海の外越に備う」という記述が非常に示唆的である。ここで言う「外越」は東海（東シナ海）の向こう側、すなわち日本列島の北越地方に住んでいる「外越」を指していると考えられる。彼らと「内越」の交易を含めたすべての交流を絶つのが、秦の始皇帝の目的であったわけだが、この史実から逆に推測すると、当時の北越の「ヌナカワ」政権は秦の始皇帝にとって相当な脅威となっていたのであった。

こうして確認してみると、日本列島の「ヌナカワ」政権は実際「外越」の政権であり、「外越」と長江下流域の「内越」はもともと同族であった。したがって、「外越」の母語も当然越語であり、最初は玉のことを「ŋioh」と呼んでいたはずであった。ただし、この「ŋioh」は和語としてそ

のまま発音できないので、「ヌナカワ」政権が樹立され、その中枢にいたヌナカワヒメが福井県金津町桑野遺跡から出土したような玉製の珧状耳飾をつけていた時には、「ŋioh」がついに「ヌ」と約音されたのではないかと推測される。要するに、「ニ」と「ヌ」の語源がともに越語の「ŋioh」であり、「外越」と「内越」の交流によって日本列島と長江下流域が緊密に結ばれていたのであった。

追記

本論を書き終えた後に分かったことだが、2004年9月から12月まで、中国の早期秦文化連合考古隊が甘粛省礼県の鸞亭山祭壇遺跡について考古学的調査を行い、漢代の円形祭壇遺跡で天地の神を祭った後に埋納したと思われる大量の璧や圭（末頁の写真9を参照）を発見した。本論第1節に引用した『山海経・西山経』冒頭の記述が連想される。

なお、このたびの考古学的新発見について、『中国歴史文物』（中国国家博物館編集出版）二〇〇五年第五期はすでに論考を二篇掲載し、その意義を高く評価している。

注

- 1) 前野直彬著『全釈漢文大系第33巻 山海経・列仙伝』（集英社、1975年10月）
- 2) 〔漢〕許慎撰、〔宋〕徐鉉校訂『説文解字』（中華書局、1963年12月）
- 3) 小川環樹・西田太郎・赤塚忠編『新字源』（角川書店、1968年1月初版）
- 4) 李国棟著『「邪馬臺」は「やまたい」と読まず』（白帝社、2005年9月）
- 5) 日高正晴著『西都原古代文化を探る—東アジアの観点から』（鉾脈社、2003年9月）
- 6) 藤堂明保監修・清水秀晃著『日本語語源辞典』（現代出版、1984年7月）
- 7) 李珍華・周長楫編撰『漢字古今音表（修訂本）』（中華書局、1999年1月）
- 8) 奈良文化財研究所編集『日本の考古学』上巻（学生社、2005年12月）
- 9) 『NICHIBUNKEN JAPAN REVIEW — Journal of the International Research Center for Japanese Studies』Number18（国際日本文化研究センター編集発行、2006）
- 10) 陳橋駟著『呉越文化論叢』（中華書局、1999年12月）所収
- 11) 〔後漢〕袁康・呉平輯録、俞紀東訳注『越絶書全訳』（貴州人民出版社、1996年10月）

写真注

1. 陳同楽・陳江編撰『老骨董鑑賞袖珍手冊・良渚玉器』（江蘇美術出版社、1999年12月）からの転写。
2. 同上。
3. 同上。

4. 張俊勛原作、熊寥訳注、王智敏図説『壽山石考』（芸術図書公司、1996年8月）からの転写。
5. 同上。
6. 新潟県糸魚川市姫川産翡翠原石。フォッサマグナミュージアム所蔵。
7. 横山浩一・鈴木嘉吉・辻惟雄・青柳正規編著『日本美術全集第1巻 原始の造形 縄文・弥生・古墳時代の美術』（講談社、1994年4月）からの転写。
8. 新潟県佐渡島産赤玉。フォッサマグナミュージアム所蔵。
9. 『中国歴史文物』（中国国家博物館編集出版）二〇〇五年第五期からの転写。F3第五組。



写真1



写真4



写真2



写真5



写真3



写真6



写真8



写真7



写真9

日本列岛与长江下游的玉的纽带

李 国 栋

上古时代，中国人曾用玉器祭祀山神，《山海经·西山经》记载：祭祀崑山神时，人们曾“斋百日以百牲，瘞用百瑜，汤其酒百樽，婴以百珪百璧”。

长江下游的越文化圈自古尚玉，以玉祭祀山神“巍”。越语称虎为“巍”。笔者以为，良渚文化玉琮、玉柱或玉佩饰上所雕的圆眼阔鼻大嘴的神兽就是“巍”。

越语称玉为“*ŋioh*”，古日语称玉为“*ニ*”或“*ヌ*”。从音韵学角度看，“*ニ*”和“*ヌ*”皆源于“*ŋioh*”。

23000年以前，海面比现在低136米左右，东海大陆架曾是广袤的原野，越族就曾生活在这片土地上。但是，从15000年起卷转虫海侵开始侵蚀东海大陆架，12000年以后越族开始迁移。迁到长江下游的越族被称为“内越”，即后来的越国；迁到日本列岛的越族被称为“外越”。笔者认为，日本列岛北越地区的“*ヌナカワ*”政权就是以玉为权力标志的“外越”政权，而日本九州南部的“*ニニギノミコト*”则是秦始皇统一中国时逃离越国的“内越”移民政权。

从日本列岛北越地区和九州南部出土的具有越族特色的古玉器看，玉就像一条纽带把日本列岛和长江下游紧密地联结起来了。